

愛と恋、その発生と系統(四)

——比較心理学的推測——

宮 孝 一

前 目 次

(十一) エディプス・コンプレックス説

- (イ) フロイトの立証過程(一)類型夢
- (ロ) フロイトの立証過程(二)戯曲「エディプス王」(以下次号)
- (ハ) フロイトの立証過程(三)体験と自己分析
- (ニ) フロイト以後の精神分析諸派の見解
- (ホ) フロムフロイト説批判
- (ヘ) フロムの批判の批判
- (ニ) フロイト説批判

前 お き

動物界における愛と恋の種々の現われ方について、既に私は本論集に三回連載してきた。決して十分な記述でなかったことは、私の十分承知しているところであり、一つには私の不勉強のせいであるが、実際に科学的事実が未だ十

分研究され確定されていないということにも由るのである。とにかく、我々は不十分ながら一応の概観をなし得たとして、いよいよヒトに於ける恋と愛に取り組む段階に來たわけである。

これまでの論述のなかに、問題の輪劃をはっきりさせるために、所々ヒトの事に触れてきたが、それは論及したに止まって、ともに採り上げたわけではなかった。今、主題としてヒトを採り上げる場所に来て、私が困惑を禁じ得ないのは、材料が余りに多く、多様多彩であるにも拘らず、科学的に究明された事実というものが余りにも少ない、ということを見出すからである。別の言い方をすれば、文学的・芸術的・評論的・哲学的な感想や考察はあり余るほどあるけれども、因果的関係を確定するに足る記述は余りにも乏しいのである。宗教的道德的主張は可なり明瞭であるけれども、肝心の事実、或は事実の経過はそれほど明白ではない。体験の表白は多すぎるほど文字になっているけれども、理論的裏づけは皆無に近い、と言っても言い過ぎではあるまい。愛の実験的研究に至っては、動物において、ようやくその端緒が開かれたに止まっていることについては拙論の(一)のはしがきで言及した。要するに恋と愛は、これまで科学的研究の対象として採り上げられたことが殆んどないのである。というわけで、我々が採り上ぐべき文献は当初考えていたよりは少なくて済みそうだし、論証の根拠とするに足りる事実もそう多くはないと云えるようである。

そうした文献の中で、発表の時の前後、事の順序は一応無視して、我々が先づ採り上げたいのはフロイトである。フロイトは現在知られている愛と恋の理論構成の中で、最も包括的で、最も鋭い洞察に基き、人間精神の最も深い処まで、探究の針を突っこんでいると一般に考えられている。それに学問の世界でない一般大衆の愛の通俗観念に広く且つ大きい影響を及ぼしている。なぜこのような状況になり來ったのであろうか。それが真理であるためであらうか。この点については、後述に明らかのように、フロイト直系の弟子の間からさえ疑問と否定が投げかけられている。理論の真偽はそれとして、世界で最も有名であるという点は、多分誰も承認するであらう。丁度スタンダーの

恋愛論の核心である結晶作用が、その真偽はとにかく、誰もが口にするように。

フロイトの恋と愛についての説と言っても、それは彼の精神一般、特に性についての独特な理論構成の中に組み込まれているので、リビド理論・本能理論はもとより、精神の構造模式と作用機序である無意識過程即ち抑圧・抵抗・転移などについて、一応の知識と理解を前提としないでは、論述できないのであるが、ここでは焦点を、彼の創見であると自ら称し、他も認めているエディプス・コンプレックスに絞ることにする。フロイトの学説？については、彼自身が通俗的な入門書を書いているだけでなく、後人の、特に近來は邦人の紹介的な手輕な本も数多く出版されているし、選集の翻訳も出ていることであるから、それらを参照されんことを。エディプス・コンプレックスは彼の理論構成の礎石であり脊骨であるばかりでなく、その立証の方法において、彼の理論構成の特色を最もよく現わしているものである。それに加えて、彼の自負するところ最も大きく、彼自身これを発見と称し、宇宙論におけるコペルニクスの地動説、生物論におけるダーウィンの進化論に比肩するものとしている。それほど自画自讃しているのである。

(十一) エディプス・コンプレックス説

(イ) フロイトの立証過程 (一) 類型夢

フロイトがエディプス・コンプレックスについて、又その名称を借りてきたところの古代ギリシャの戯曲ソポクレスの作品について、彼自身が経った説明を与えているのは、彼の「夢判断」⁽¹⁾の中に於てである。「夢判断」はユニークな著作であり、研究書とも目される面がない事はなく、自らもそう称してはいるが、實際は一般大衆向けの述作であり、学界・学者を讀者に予想して書かれたものではないようである。これは彼の置かれている境遇から、止むを得ない、また恕すべき点がなくはないと言うべきであろうが、學術的論文でないことは惜しまれることである。ここで境遇というのは彼が民間の一開業医であり、これ以前に論文の形で学界に発表したヒステリーや性に関する報告が認

められなかったばかりでなく、劇しい反対と憎悪すら招いていた事情を指す。尤も學術論文でない故に、云うなれば怒しいままな、証拠不足の立論をなし得たのであると意地悪い見方をすることも出来る。その上、彼自身告白しているように、彼の使った夢の資料が「そこで私の手持ちの夢と云っては、自分自身の夢と、それから私が精神分析による治療を行った患者たちの夢とに限定されることになった」と狭い範圍に限られているばかりでなく、患者の事情はこれを秘匿する義務があり、彼自身の心の内幕は他人の眼にさらしたくないので、「私が省略や入れ換えなどによって多くの秘事をほかしたいという誘惑に抗し得なかったのは当然のことである。省略や入れ換えをする度毎に私の使用した実例は著しくその価値を減ぜられた」と自分でも云っているのである。

以上のような事情を念頭において、我々は彼の述べているところを見てみよう。「夢判断」の第四章夢の材料と夢の源泉は更にA B C Dの四つの小見出しで区分されているが、そのDは「類型的な夢」となっている。この節に、我々の問題とするエディプス・コンプレックスの話が出てくるのであり、そして彼の著作に初めて出てくる個所である（第一版は一九〇〇年・我々の底本はその後の補筆のある第八版一九二九年）。「類型的な夢」は更に小節に分けられるが、それは(イ)「裸で困惑する夢」、(ロ)「近親者が死ぬ夢」、(ハ)「試験の夢」で、「近親者が死ぬ夢」には二種類あって、「第一は、そういう夢を見ている、夢を見ている当人が夢の中で少しも悲しみを感ぜないで、夢から醒めて自分の無情を自分で訝り怪しむような場合、第二は、夢を見ながらひどく悲しみ嘆いて、ぬむりながらも熱い涙を流すという場合。第一の夢には触れずにおこう」とフロイトが言うのは、彼の考えでは、「この第一種は類型夢とは見做しがたいから。この種の夢を分析してみると、それがその内容とは別のあるものを意味していて、なんらか別の願望を隠蔽する役目を持っていることがわかる」。第二種の夢、「大切な身内の誰かが死んで、その際苦痛的な情緒が感ぜられる夢は、上記の夢とは全然違う。こういう夢は、夢内容が証明しているように、その問題の身内の者が死んでくれたらいいのという願望を物語るものであって……」と説明されている。

この一見して奇異な、常識に真向うから反対する夢の意味づけ、夢の解釈に対しては、フロイトは常識人の反対を予想していて、何故この種の夢がかく解されるかの理由を挙示することになる。その筋道は次の如くである。夢は願望の充足である、というのが周知のようにフロイトの夢解釈の大前提であるが、こうした願望は常識的には不道德・反倫理な内容を持ち、昼間覚醒時には良心（フロイト的用語では超自我）によって抑圧されている。それが睡眠時に超自我の検閲の網の目をくぐって夢の中へ出現する。というのは願望は現実には実現されぬものであるが、消滅していったわけではなく、フロイトの表現では「血を吸ると生き返ってくる」ところの、ハオデュッセイアの亡霊の如きものだVと言われているのである。そして「こうした願望の根底には、ごく早い幼児時代の記憶が横たわっている」。しかし彼は附け加えて、そうした夢が「現在死ねばいいと望んでいる証拠だとは絶対に言わない」ただ「幼年時代のある時期に——その身内の者が死ねばいいのにと願ったことがあるという推論をするだけで満足する」と。そこで彼は「とうの昔に消滅していった幼児の心的生活の一部をここに復元してみせる」ことになる。

第一点、「子供は絶対に利己的である」こと。「現在では同胞を愛していて、それが死にでもしようものなら悲しみの涙を流そうという多くの人たちも、彼らの無意識のうちには昔から同胞に対して悪い願望を抱いているのであって、その願望が夢の中に出てきて、自己を貫徹するのである」。この具体的実例としては、「私がその恐怖症を分析した三歳半のハンスは、妹が生れて間もない頃に熱にかされてこう叫んだ。「妹なんか、僕いらないよ」。それから一年半してハンスは神経症に罹った。その時彼は、小さい妹が死んでしまうように、お母さんが妹にお湯をつかわせる時、盥の中へおっこことせばいいのという願望をはっきり表明した。しかもこのハンスは行儀のいい、やさしい子供で、その後ほどなくしてこの妹を可愛がって、特によく面倒を見てやったのである」が引用されている。このあとに続いて、彼は具体例を以下六例述べているが、第二例は「だけど、あたしの赤い帽子は赤ちゃんに上げないわよ」と云う四歳の女兒。第三例、第四例は後回しにして、第五例は二歳そこそこのフロイト自身の甥の話で、生れてきた小

さい妹を「ちっちゃい、ちっちゃい」と不興げに批判し、その後「赤ん坊は歯がないや」と軽侮する。第六例はやはりフロイトの姪で六歳の妹について「ねえ、ルツィー（妹）にはまだそんなことわからないわねえ」と居並ぶ伯母たちに同意を求めたという話。第四例は作家シュピッターの作品の引用で、作家自身が幼い頃（何歳か不明）、弟のことを「小さな奴だった……一休この弟が何の役にたつのか……なぜみんなはこいつを私と同じようにちやほやするのか……私一人でたくさんなのに、こんな弟など何の意味があらう……それにこいつは時には私の邪魔になる……私が祖母さんに甘えると、こいつも同じように甘ったれる……」。以上第二、第四、第五、第六例はいづれも小さい弟妹に対する嫉妬か敵意で、フロイトによると、「同胞への敵意を意識するのはずっと後のことだとしても、この敵意は既に同胞が生れ落ちた時に目覚めるのであらう」「この年頃の子供がもつ嫉妬心は強烈且つ明白である」。

同胞への死の願望が行為においてははっきりしているのは第三例で、それは「満三歳にもならぬ女の子が揺り籠の中の赤ん坊を締め殺そうとした事件も私は聞いている」と記されているだけで、事件発生の日時・場所・氏名などは何の記述もない。「私は聞いている」だけである。第七例は、彼の婦人患者の話である。「彼女はこの夢を四歳の時に初めて見て、それ以後繰り返し見ているという。この夢を最初に見た時、彼女は兄弟姉妹のうちで末っ子であった。△沢山の子供、みんなわたしの兄だとか姉だとか、男女のいとこたちで、草原の上で飛んだり跳ねたりしている。突然みんなに翼が生えて、飛び上って、どこかへ行ってしまう。彼女にはこの夢の意味が皆目わからなかった」。この第七例には、ほかの話と区別しなければならぬ三つの特徴がある。第一点、第一例から第六例までは、実は夢の話ではない。大人の記憶していた、子供の行動観察の記録である。第七例だけが夢の話である。第二点、第七例だけが本人自身が物語る話である。そして第三点は、夢を見た本人が妹（末っ子）であることである。その他の例はすべて兄（長子）の弟妹に対するものであった。次女次男以下の者の例は、フロイトのその他の引用の中にも殆んど現われ

てこない。この点を私はフロイトの引用例の一つの特徴とみている（フロイトは長男ではないが長男的境遇に育っている。この点は後述）。この夢で「翼が生えて飛んで行ってしまふ」に対するフロイトの解釈は、予想される通り、この婦人患者が兄姉の死を願っていたというのである。なぜそう解釈しなければならぬのであろう。フロイトは説明して、この婦人患者の四歳時に子供のひとりが死んだ時、「子供が死んだら、その子はとうなるの」とたずね、「そうすると羽根が生えて天使になるのです」という返答を受けたにちがいない。（傍点は宮）。こういう説明をきかされたであろう子供が、のちに夢をみて、同胞はみんな天使のように翼を持って——ここが肝腎な点だが——飛び去ったのである。……この子だけがたったひとり残る。これは一寸考えてみれば、その子にとってどんなに素晴らしいことかすぐわかるだろう」とフロイトは解釈するのである。

ここでフロイトは「一寸考えてみればすぐわかる」というのだが、我々には一寸考えてもわからないのであり、それに「その子にとってどんなに素晴らしいことか」という解釈は、更に不可解である。夢自体に即して言うなら、草原で、兄姉がみんな飛んで行ってしまった、あとにひとり残された妹は、どんな感じで、それを受けとめているのである。普通なら、おいてきばりにされた、自分も一緒に行きたい、じっとその草原に止まっておれない、何となく淋しくなってきた、誰か助けにきて頂戴、という風になるのではあるまいか。フロイト式に、彼と逆の推測をすれば、ふだん、或はある時、仲間はずれにされたことのある子供が草原にひとり取り残されるような夢をみるのではないか。あえて想像を逞しくすれば、この婦人患者は、現在近親兄弟から見放され、誰も見舞にこない状態におかれていて、それで昔の幼い時に仲間はずれにされ見棄られた記憶が夢の中に復活してきたのではないか。想像と推測は、どのようにもすることが出来るが、ここでどうしても見過せない点は、フロイトが冒頭で類型夢を二種に区別し、その一方だけを問題とすると云った所で、採り上げる夢は第二種の夢で、「夢をみながらひどく悲しみ嘆いてねむりながらも熱い涙を流すという場合」と明白に規定していることである。ここに引例されている第七例の婦人患者の夢は、

悲しみ嘆いて熱い涙を涕す種類には、はいらない。従って類型夢と見做せない。むしろ採り上げないと云った第一種の夢、即ち少しも悲しみを感ぜない種類に属さすべきではあるまいか。それにそもそもこの夢を、近親者が死ぬ夢に入れるのはおかしい。羽が生えて飛び去ること、いなくなることは、子供の思想では死ぬことと同じだというのが、別の解釈が出来る場合もある。ただ死を願っていると、分析医が解釈するから、死の夢になるのである。

そのほか私が疑問に思っている点は、フロイトが幼児の行動観察の引用で、甥や姪を引合に出しているのに、自身の子供については「つぎつぎと生れた私自身の子供たちについては、こういうこと（同胞間の、というより兄弟の姉妹に対する嫉妬と敵意）を観察する機を逸したが」と、わざわざ断り書をしていることである。この間の親子関係の時期を摘記すれば、フロイトの結婚は一八八六年、長女アンナの出生は一八八七年、長男マルチンの出生は一八八九年、次男オリバーは一八九一年以下、次男エルンストが一八九二年、次女が一八九五年、子女出生はこの年が最後で、計三男三女である。「夢判断」の刊行は一九〇〇年であるから、長女はその時十七才、末子の三女は五才に当たっている。こうした状況で彼は開業医で大抵は自宅にいたのであるから、観察の機を逸したという彼の言葉は、私には眉唾ものと思われるのである。彼は序文で断っているように、「省略や入れ換えなどによって多くの秘事をばかしたい、という誘惑に抗しえなかった」のではあるまいか。或はまた次のように推定すべきであろうか。ここに典拠として引かれた幼児や女患者、作家の告白、赤ん坊をしめ殺そうとした三歳の女兒など、いづれも精神異常か神経症者の異常な行為・異常な夢であって、彼の子供たちは正常であるから、そうした傾向・行動は見られなかった。もしこの後者の推定が当たっているとすると、それは彼の子供達にとっては仕合せであるが、フロイトの学説全般にとって、特に彼の性と愛の理論の根底となっているエディプス・コンプレックス説にとって、重傷を与えるものとなる。何故に私は、類型夢の第二種「近親者が死ぬ夢をみながら悲しみ嘆き熱い涙を涕す」に、これほど深く立ち入り、過剰なまでに原著者の記述を引用するのか。私にとっては、夢の内容も問題であるが、フロイトが彼の理論を構成し

てゆく立証方法、彼の事実の認定の仕方が一層問題に思われるからである。以上によって、子供たちの、その兄弟姉妹間の心理的關係（敵意・嫉妬・死への願望）について、フロイトがいかなる証拠に基づき、いかなる証明を与えたかは、十分とは云えないが必要な程度には展示し得たと思う。この同胞間の心理的關係は、彼が親子間の心理的關係へ進む伏線である。親子間とは即ちエディプス的關係である。

「さて子供の、同胞の死を願う氣持が……子供の利己主義によって解明されるとしても、両親に対する死ねばいいVという願望は一体どう説明されるのだろうか」とフロイトは書き出している。「なぜというに、両親は子供にとって愛情を注いでくれるひとであり、子供の欲求の数々を満たしてくれるひとであるから、まさに子供の利己主義的な諸動機からしても、両親の生存を願うのが当然の話ではなからうか」。我々がここでフロイトの言い方に注意しなければならぬ点は、両親に対する「死ねばいい」という願望は、一般に広く見出すことの出来る普遍的な現象（或は事実）である、という大前提を、彼が既に立てていることであつて、そうした願望が特異な環境条件に於てのみ見られる、或は神経症的な、異常精神にのみ見出せる特殊現象であるという見方を読者の眼から隠していることである。多数の子供が、人類のすべての幼児が、親の死を願うなどという事実は、單なる現象としても、確認されていないのである。この立論証明の仕方に限らず、一般にフロイトは普遍的現象と特異的現象の区別を全く無視している。あえて云えば事実に対して故意に眼を塞いで、特殊例から普遍的立言を行なうのが毎度のことである。特殊即普遍、普遍即特殊という思想が哲学にはあるが、現在の科学方法論の見地から見れば、フロイトには統計学的標本の考慮が全然見られない。物理化学の実験は、巧みに精密に行なえば条件を純粹に整えることが出来るから、一例から全例を推定することが可能だが、生物学的・心理学的・精神病的現象では、個体および環境条件を規定する要因が雑多であるから、標本数と母集団を必ず考慮の中にいれなければならぬ。フロイトは学生時代は暫く生物学的研究をやったのであるから、もう少しこういう配慮をしてもいいと思われるのに、全く哲学的に一例についての直観から（思

い付き或は洞察）から忽ち普遍的結論を引出しているようである。

前述の引用文に引き続いて、彼はすぐ「両親が死んでしまう夢では、十中の八・九は両親のうちいずれか一方が死ぬのである。そしてその一方というのは、その夢を見る本人と性を等しくする親である。つまり男の子なら父親が、女の子なら母親が死ぬ夢を見る。」この経験からして、上に提起した難問解決の緒口が開けてくるのである。私はこれが通則だといわれないが、十中の八・九はという意味でそういう風なのだから、この現象は一般的意義を持つ一契機によって説明される必要があると思う。大ざっぱな言い方をすれば、性的偏愛ともいふべきものが早くから現われてきて、男の子は父親を、女の子は母親をそれぞれ自分の恋仇と見て、父親又は母親をなきものにすれば、自分の利益が増すばかりだと考えてでもいるような具合なのである」。

これがフロイトの主張するエディプス・コンプレックスの提言であり、その要約した記述である。通俗読物と思つて読んでいる読者はいざ知らず、科学的論証を期待する読者は、こうした夢は誰が見たのか、その人の何歳の時か、当時の本人の家庭事情や状態はどうであったのか、この程度の事は是非知りたい、知っておくべき事項であると考えらるであらう。こういう疑問に対して、フロイトは何も答えていないのである。

フロイトが読者の反問を予想して答えているのは、(一)父母を敬愛するという文化の要請（モーゼの十戒の第五戒）と日常見聞する両親と子の事実関係は別であること。モーゼの十戒の神聖さのために現実認識のわれわれの眼は曇っていること。(二)人間社会の貴賤都鄙の各層において、両親に対する敬愛は他の利害関心の前には影が薄いというのが普通であること。(三)神話伝説のうちに伝えられている父親の絶対的権力とその権力行使の残酷さの例として、クロノスは自分の子供たちを嚙みこんでしまひ、ゼウスは父を去勢して、支配者として後釜に坐る。父親が威勢を振うと、息子は父親の敵の位置に追いこまれ、父の死によって自ら支配者の座につこうとする息子のおせりは烈しくなる。(四)現代社会においては、父親は息子に自主的に人生行路の選択を許さず、独立に必要な生活手段を与えるのを拒

むから、初めから父と息子との関係の中にあつた敵意が助長されること。(四)父親をなくした息子の悲哀は独立に対する満足感に打ち負されるという医者意見。(六)母親と娘との相剋が生ずる動機は、娘が成人して母親を自分の監視人のように思い始める頃に生ずること。

これらの理由づけのうち、(二)(四)(五)に対してはフロイトの指摘する事実を反対の事実を挙証することは容易である。それにこれらはみな子供が成人してからの親子関係である。(三)は神話伝説であるから、事実として伝えられている親子の愛情物語、孝子美談を挙げれば反証とならう。(一)はゾルレンとザインの差別であつて、フロイトはモーゼの爲にわれわれが現実を見る眼が曇らされていると云うが、それは宗教家道德学者に通用するだろうが、科学者には当てはまらない。

特に私が注意したいのは、フロイトの眼中には息子と父親の関係が大写しになっているらしく、母親と娘はぼやけている点である。これは後々までそうである。そして彼は彼の抱いている結論を提出するのみで、そこへゆく筋道は略されている。例えば「男の子なら父親が、女の子なら母親が死ぬ夢を見る」と云っているが、これを証拠立てる夢の実例は一つも呈示されないのである。彼はそう云うだけなのである。青年期壮年期になつて両親といろいろな利害関係から、意見が合わずに相争う事例は、これこそ証明なしに誰でも納得することであるが、そうした事例が親に対する幼児期の性愛関係に由来するという提言は証明を要するものと私は考える。

ところがフロイトは「すべてこういう有様は何人の眼にも明らかであらう、とはいえ……近親者が死ぬ夢」を説明することは出来ないのだ。しかしわれわれは、……両親が死ぬばいという願望はごく早い頃の幼年期に絲を引いていることを知っている。かかる推測は、神経症患者を精神分析してみると、一切の疑いを排除する確実さを以てて実証されるのだ」と云う。それで彼の最後の切札はやはり夢の分析による所見、つまり夢判断にかかっているようである。

しかし彼は立証する前に又もや彼の結論的見解を既定の事実のように提出する。それが一切の疑いを排除する確実さをもっているかどうかは、我々がこれから検討してみなければならぬ。彼は云う、「この分析によってわれわれが知り得るのは——この分析が、どの分析を指しているかは読者には不明——子供の性的願望が目覚めるのは非常に早い時期であること……又女の子の最初の愛情は父親に、男の子の最初の愛情は母親に向けられるということである。そこで父親は男の子の、母親は女の子の恋仇ということになる」。そして「子供たちは、こういう感じをあつさり死の願望へと転化させる」と。恋仇は死ねばいい、恋仇は邪魔者であるから行ってしまった、フロイトは簡単にそれが一般的であるかのように云うが、両親は恋仇である前に、フロイトも前述で認めているように、食物を与える者であり、子供を可愛がっている者である。だから親に対し死んではいけない、行ってしまったら困るVという感じも子供にはある筈である。食物を与えない親、子供をいじめる親、そういう親を（親でなければなお更）死んでしまえと子供が思っても不思議ではない。そういう異常な親の例も世間には稀にある。

フロイトは続けて云う。「両親の子供たちへの態度のうちに、既に性的選択は現われている。自然に父は小さな娘を可愛がり、母は息子たちに加担する」……「そんなわけで子供は自分自身の性欲衝動に盲従し、又それと同時に、子供が両親に対する選択と同じ意味で両親も子供を選択するとすれば、子供は元来両親から出てきた刺激を更新するということになる」「子供に現われてくるこれら幼児的愛情の諸徴候の大部分は看過されるのがつねであるが、その若干は幼児時代をすぎてから、やっと大人たちの注意を惹く」。ここで、我々が期待していた精神分析による所見ではなくて、ありきたりの日常観察が引用されている。(一)知合いの八歳の少女、母親が呼ばれて食卓を離れると「さあ、こんどはあたしがママよ、カールさん、お野菜はもういいの、さあもっと、どうぞ」。(二)利発な四歳の女兒は「お母さんがいつかどっかへ行ってしまふかもしれないわ。そうしたらお父さんはあたしと結婚するのよ。あたし、お父さんのお母さんになりたいの」。(三)「父親が旅行中であるために子供が母親とひとつ寝床にねていたのに、父親

が帰ってくるとまた元の子供部屋へ追い戻された男の子……父親がどこかへ行ったきり戻ってこなければいいと思う。この願いの達成される一手段は、父親が死ぬということである」。この事例は何歳児のどこの誰とも断つてはいない。

ここに列挙された三例のうち(一)と(二)は、日本の女の子では所謂△ままと遊び▽の中で、普通人も目にする情景であって、女兒の性的願望が父親に向いている、それどころか母親にとって代って父の妻の座につきたい欲望を示しているなどとは到底解されないと思う。例の(三)は、これだけが男の子の例であるが、これが実は、外ならぬフロイト自身の体験についての、彼が自己分析と称する回想の解釈によるものであるらしい。この事については、後に再び取り上げる積りである。私がここで、これら三例について云えることは、女の子供を観察していると(第三例は別にして)、ある時ある場合にこうした事例が見られることがあるが、そうした心情は子供の生活の基調になっているのか即ち子供たちは一貫してそうした心情をもっているのかと云うと全部の女兒がそうではなく、△おませな子、お茶っぴい▽の女兒に特に観察される例ではあるまいか。日本の近代の女の子は、稀には男の子を交じえて、△お父さんとお母さんごっこ▽や△お医者さんごっこ▽などもするのである。男児の例が、フロイト自身の体験だけであるのは、立証力が薄弱であると云えよう。問題がエディプス・コンプレックスであるから(女兒の場合は男の子と区別してエレクトラ・コンプレックスという言葉を使用した)男児の事例をもっと数多く呈示すべきなのである。それを彼は怠っている。探しても見当らなかったのではないかと私は疑っている。フロイトの立場に立って彼の理論を弁護するなら、日常観察で捉えられるこれらの例は、氷山の一角であって、氷山の底辺が海水面以下に隠されているように、男児の母親への、女兒の父親への性的指向・性的欲求は彼らの心の深みに伏在しているのであるが外へは出てこないのであると云えるでもあろう。

フロイト自身は、次のように文章を続ける。「子供たちについて試みた以上の如き観察が、私の提唱した見解に何

の無理もなく当てはまるとしても、これらの観察は私にまだ十二分の確信をえさせてくれない。それは大人の神経症患者の精神分析によって初めてえられるのである」。十二分の確信を著者であるフロイト自身にも与えなかった例示であるなら、我々の疑いが氷解しないのも当然である。彼の最後の拠り所、患者の夢とその分析に我々も又期待したいと思う。ここでフロイトの掲げる夢の例は三例である。そして又しても遺憾に思うことは、女性患者二名と男性患者は僅か一名であることである。エディプス・コンプレックスについては、我々はどうしても男性の証言と証拠を見たいと思っているのであるが。

第一例、ある日泣いている一婦人、彼女の言葉へ自分はもう親戚に会おうと思わない、それから、いきなり夢の話、「四歳の時△山猫らしきものが屋根を歩いている、何か落ちた、自分かもしれない、そのあとお母さんが死んで家から運び出された。ここまで話してさめざめと泣く」。フロイトの解釈（即ち分析）『これは母親の死んだところを見たいという幼年時代の願望を物語っている。だから泣かずにはいられない。それで親戚は彼女を見てぞっとするのだ。フロイトが患者に分析の結果を話さないうちに早くも患者は夢を説明する材料を話し出した。△山猫の眼は彼女の小さい頃、街の悪たれ小僧が彼女に云った悪口、三歳の時屋根から煉瓦が落ちて、母親の頭に当り大出血したと。

第二例、若い娘、始め躁狂性錯乱、母親に対する強い憎悪、母親が近づくと思ったり打ったりする、姉には従順、のち無感覚状態で睡眠障害を伴う。夢の大部分は母親の死を内容としている、即ち、ある老婦人の葬式、姉と喪服をきてテーブルについている、少し容態がよくなってからヒステリー性恐怖症状、恐怖の中で一番患者を苦しめたのは母親の身の上に何事か起きはしないかという不安発作、どこにいてもこの発作で急いで帰宅し母の無事を確かめずにはおれない。分析『錯乱状態では母親への無意識的敵意が勢力をまし、第一次安静期ではこの敵意が母親への死の願望を実現する手段はただ夢あるのみ。正常に近く回復するとヒステリー性の反対反応及び防衛現象としての母親に対す

る病的な気遣いが現われてきた。

第三例、若い男性患者、強迫神経症で道も歩けない、というのはすれちがう通行人を殺すという強迫観念がある。毎日している事は、町での人殺しの告訴に備えてのアリバイの証拠作り。フロイトの分析『この強迫観念の原因は少々厳格すぎる父親への殺人衝動によることが明らかにされた。この衝動は七歳時に意識されたが、遠く幼年期に発するものである。この男は苦しい病気に罹り、それが治り、それから父親も死んで、患者三十一歳になった時、上述の強迫観念が現われた。そしてこれが恐怖症の形で、父親でなく見知らぬ他人へ移しかえられたのである。

私の註解。第一例の婦人、「お母さんが死んで家から運び出された」という四歳当時の夢から、すぐこれが「母親が死んだところを見たい」という幼年時代の願望」を物語るとの推理は、何の説明も理由づけもなく、僅か七行で片づけられている。フロイトは「願望夢として以外には判断できない」と前おきしているが、願望は願望でも、母親に死なれたら困る、母親がどこかへ行ってしまったら途方にくれる、という願望だってあるわけだが、どういうわけかフロイトの願望は死んでしまえ、相手がいなくなれば自分は倖せであるという方向のものだけで、相手が生きていてくれ、私を見棄ないでくれ、というのが全然出てこない。我々普通の正常人が見る夢は果して死の願望だけであろうか。三歳の時煉瓦が母親の頭上に落ちて大出血した事件は、おそらく彼女に大恐怖を与えたものであろうし、その時三歳の女儿が母親が死ねばいいと思ったか、死んだら困ると感じたか、立証は出来ないが、後者と解するのが妥当であろう。この婦人が初めさめざめ泣いていて親戚に会う気がしなかったと言った言葉は、これを夢と結びつける必然性は何もない。彼女はいきなり話題を転じて夢の話を持ち出したのであるから。母親の死んだ夢を見たのであるから患者がそれを思い出してさめざめと泣くのは当り前の事ではないだろうか。母親の死んだところを見たいという願望がフロイトの云うように潜在していて、それが夢の中で願望充足されたとすれば、「だから、彼女は泣かずにいられない」というフロイトの解釈のへだから√は、私には全く解らない。もしそうなら夢の中では喜んでいる筈だし、夢の中で

喜んでいて醒めて泣くということがあり得るだろうか。或は夢の中では喜んで母の死体を見ていて、醒めて良心の苛責で泣く、とするか、或は死の願望は無意識で、泣くのは醒めてからの意識である、と理解すべきか。夢は不安定・不確実で、まして氣狂いの夢など、どこを信用すればいいのか。フロイトは夢は願望が歪曲されて表現されていると云うが、夢として歪曲されないとしても、夢を他人に語り告げる時、患者が分析医に告白する時、故意の或は故意でない歪曲を受けないとは断言出来ない。この後者の歪曲又は作為の可能性についてフロイトが少しも言及していないというのは片手落ちではないか。夢の中では歪曲されて表現されるなら、それが言語を介して他人に伝えられる時、それ以上に歪曲されると仮定すべきではあるまいか。私はむしろ、夢の中では歪曲されない、という意味はフロイトの用語を使えば、夢は上位の超自我（即ち良心）の検閲を受けない、と想定すべきであると考えている。

第二例、若い娘、(i)錯乱状態で母親を罵ったり打ったりするから、母親に特別の憎悪を向けているとフロイトは判断している。(ii)安静時の夢に「ある老婦人の葬式、喪服を着てテールについているについて、その意味は母の死の願望で何の疑うところはないと。(iii)少し治ってきた時、ヒステリー性恐怖が現われ、「母親の身の上に何事か起きはしないか」との不安発作をおこす。(iv)の夢の解釈について、ここに出てくる老婦人が母親の代り（仮装人物）であるという何の根拠もない。世の中には、そして又この若い娘のまわりにも老婦人はたくさんいるであろう。(v)の躁狂時と(vi)のヒステリー性不安発作は、現象として全くあべこべの意味を示している。或は示しているかの如くに見られる。母親への氣違ひみた憎悪と母親への病的な氣遣いである。どちらが彼女の本音なのか。或はその時その時の病的症状でどちらもほんとうではないのか。フロイトは打ったり罵ったりが彼女の心の本態であって、母親への過度の氣遣いは自己防衛のための偽装であると云う。彼女は何に対して防衛するのであるうか。フロイトは何の説明をもしていない。記述が余りに簡単で（約一頁）、我々は想像するより仕方ない。フロイトの用語をここに適用していいものなら、愛憎の共存（アンビバレンツ）としてもいいであろう。但し、この例は夢からの分析でなく、患者の行動に敵

意も愛情もまぎれもなく表現されているのである。

第三例、三十一歳の強迫観念をもつ男、分析は父親への殺人衝動を見出したと云うが、分析の過程・内容は全く語られていない。殺意を父から（既に死亡している）見も知らぬ通行人へ転移した過程も不明。「肉親の父を殺そうという気持になった男なら、無関係な他人の命など顧慮しないだろう」。関係妄想・被害妄想が全然関係のない人へ向うことのある事例は沢山報告されているが、それにしても記述も推理も簡単にすぎる。エディプス・コンプレックスを証拠だてる唯一の最も重要である筈の、この症例にフロイトは僅かに半頁しか割いていない。六三五頁（訳本は上下巻七六一頁）に及ぶ大部の「夢判断」において、たった半頁とは。読者は著者の書いた通りを信ずればいいのさ、とフロイトは思っているであろうか。彼の患者については、彼の下した解釈だけが、唯一の正当な解釈で他の容喙は許さない、と彼は考えているらしい。この症例はフロイトの解釈通りだとしても、男の子の父親への殺人衝動を示す事例がたった一例とは。しかもこれは強迫神経症の症例で、患者でない正常人の事例は一例も挙げられていない。そして症例では肝心の夢は全く記述もされず問題にもされていない。この三十一歳の殺人の強迫観念をもつ男は、一体どんな夢を見るのであろうか。我々の知りたいことを、フロイトは全く話してくれないのである。

類型夢の(四) 近親者の死ぬ夢の話を、ここまで進めてきて、フロイトは夢と症例から突然離れて、神話に彼の理論構成の典拠を求める。その前提として、彼は云う、「私のこれまでの無数の経験によれば、のちに神経症に罹る人間の小児期の心的生活において両親は重要な一役を演じているし、両親の一方への愛情と他方への憎悪は幼年時代に形作られ、後年の神経症の徴候にとってきわめて重大な意義を有する……」「だが私は、神経症患者が何か全然新しいもの、彼らだけに独特なものを作り出すという意味で、他の正常な人間たちと截然と分かたれているとは思わない。大部分の子供たちの心の中ではそれほど明瞭にも、それほど強烈にも現われてこないのに、これら神経症患者にあっては、その両親への愛憎ふたつながら誇大に強調されているにすぎない」と考える方が、現実に適した考え方だと思っ

し、又正常な子供たちを時折観察してそう考えるのが尤もだと思ふ」と。フロイトは彼の無数の経験によると云うけれども、我々が以上に少し詳しく述べて来たように、彼の挙示している実例は僅かに三例、そのうち二例は女性患者であつたし、夢は一例しか記されていない。そして、異常と正常が截然と分たれるものではないことは了承されるとしても、正常の男女児の両親への殺意の事例は、全然示されていないのである。それ故、両親への殺意にまで高まる強い憎悪は、もしそれが事実あるとすれば、のちに神経症に罹る素質の潜在している異常児童の特性と見るべきではあるまいか。正常な児童の單なる一過性の両親への反抗や敵意とは、量的に異なるばかりでなく、質的にも違ふ現象に思われる。一過性の反抗や敵意は、子供は親に叱られる度に感じてゐる。が、殺してやろうというほどの敵意は尋常一様のものであるまい。それは異例であるばかりでなく、異質の敵意・憎悪であらうと私はみるのである。

(ロ) フロイトの立証過程 (一) 戯曲オイディプス王

フロイトは正常人・正常な児童も、異常な神経症患者とその本性において同質であると想定している。換言すれば、正常人も又、変質者神経症患者と同じように、両親への恋情と殺意に高まる憎悪を心の奥に潜在させていることを立証したのである。夢と症例に依拠して彼がどのように立証しているかを、我々は見てきたが、彼が切札と頼んだ神経症患者の証拠は、余り効果的でもなく、完全というには程遠いものであつた。フロイトはここでギリシヤの劇作家ソポクレスの作品を引き、作中の人物の台詞に支持を求める。戯曲はエディプス王の古伝説を題材とするものだが、それはテーバイをめぐる伝説の一つで、エディプスの父ライオス、その妃イオカステから遡つてはタンテロスやアンチオペーとゼウス大神に及ぶラプダコス一族の大伝説の一部をなすものである。しかしソポクレス以前の古伝説については確かなことは解っていない。ソポクレスがこの名高い英雄伝説を劇化するに當つて、どういふ風に考えた

か判断がむづかしい。「ホメロス（オデュッセイア十一）ではオイディプスは最後まで王位にあり、のち戦場で殞れたことになっているから、オイディプスがわれとわが目をくり抜いた話はホメロス以後に属すると思われるし、古い伝えでは、彼と母親との間に出来たという二男二女は、イオカステの死後娶ったエウリュアナッサ（一名、エウリュガネイア）の子となっている。それがいつの間にか次第に不倫の度の大きい、激烈な話となったのである」。

このような伝説そのものは、話の筋や人物の人間関係に可成不確かなところがあり、一説とか別伝とかあって、定説は無いらしい。フロイトは専らソポクレスの戯曲に由っているが、エディプス王伝説はギリシャの最初の大劇作家アイスキュロス（前五二五—四五六）も又題材としている。彼の三部作「ライオス」（オイデプスの父）「オイディプス」「テーバイに向う七将」はその題名は伝えられているが、作品そのものは残っていない。ソポクレス（前四九六—四〇六）の作品のうち現存するもの七篇には「アンチゴネー」（オイディプスの娘）「オイディプス王」「コロノスのオイディプス」（晩年死期のオイディプス）の三篇が含まれている。我々としては、「いつの間にか次第に不倫の度の大きい激烈な話となった」と云われているから、アイスキュロス作の「オイディプス」を是非参照したいのであるが、残っていないから止むを得ない。

さて、フロイトの「エディプス」の引用の仕方であるが、約一頁の梗概が述べられる。三度の神託が劇の主要モチーフであるが、最初の神託は父ライオスが若く亡命時代に庇護者の息子の美少年に思いを寄せて誘拐し、意に従わぬので殺す。殺される破目になって、その少年はゼウス大神に祈り、ライオスがもし子を儲ければその子によって命を失うであろうというアポロン神の神託が下る。この神託はライオス王も後彼の妃となったイオカステも知っていて、子を生まないようにつしんでいたのに、ある時酒に酔いしれて遂に子エディプスが生れることになる。ここまでの話はソポクレス作品には、はっきり出ていない。従ってフロイトも述べていない。ライオス王は生れた子は殺せという。その命命に背いて母である王妃イオカステは子をキタイロン山に棄てさせる。羊飼に拾われた赤ん坊は隣国のコ

リント王と王妃に実子として養育され青年となる。第二の神託は、青年エディプス自身がわが身の出生に疑念を抱いてデルフィの神殿に詣って与えられるのだが、これが一篇の主要モチーフである「その父を殺し、その母をめとるであろう」という呪である。驚いたエディプスは、この予言を避ける為に、国を棄てテーバイに向う山の峠で、それとは知らぬ実父ライオス王の狩と出会い、争論の揚句谷に突き落す。テーバイに近く怪物スヒンクスと有名な問答があって、怪物が退散したので、テーバイ市民に迎えられ王座につくが、王妃イオカステは王座の附属品のように再び王妃となる。この辺りはまことに割り切れない人物の出し入れだが、芝居の幕は、このあと何年か経ってイオカステとエディプスの間に二男二女が出来てから、テーバイに悪疫が流行し、エディプス王が王妃の弟クレオンを追わして神託をうけさせる所から始まる。これが第三の神託で、先王ライオスの下主人を除くべしと出る。盲目の予言者ティレシヤスとの息のつまる言葉のやりとり、そのうちに、コリントス王の死を報せる使者の登場があって、何も知らないエディプスは一步一步と破滅へ近づき、身の上の秘密が明るみに出ることにつれ悲劇的效果は急テンポで高まることになる。

古伝説では、この素性が次第に暴露してゆく筋道をどのように伝えていたのか、今は分らないが、ソポクレスの劇作の手腕によって、一分の隙もなく劇は展開してゆく。緊迫した興奮の高まりはすさまじく、ギリシヤ悲劇最大の傑作とアリストテレスも歎賞していると云う。ソポクレスは、古伝説の新解釈をどの程度行っているのか。アイスキュロスと同じ主題の作品があるのだから、古伝説の新しい解釈、人物の新しい扱い方は当然予想出来る。フロイトのエディプス王の解釈に対して、我々はまずこの点に疑義を抱く。即ちフロイトはソポクレスの劇作がそのまま古伝説であり、古伝説は一種類の定本的なものがあって時の経過があっても少しも変化していない、という仮定に立っているのである。換言すれば、ソポクレスが戯曲に採り上げたモチーフがそのまま古代ギリシヤ人の、先史時代の人類の無意識の欲望をなしていると仮定しているのである。モチーフとは云うまでもなく「その父を殺しその母をめとる」

(男性の場合)である。ソポクレスは、この要因を人間の欲望としてではなく、神託として神の呪として、だから個人の意志願望にかかわりなく運命として、劇の中へ仕込んでゐる。この神託を与えられたエディプスは恐懼し、すぐさま父母の國(コリントス)を逃げ出す。彼は神託の実現を沮みたいのである。その後の行動はただ運命の糸に操られて、結果に於て呪の実現をみるのであって、彼の意志でもなく、彼の無意識的欲望のせいでもない。エディプスは健全な男性として描かれている。変態性欲的なところは少しも現われていない。フロイトはソポクレスが劇的興奮を異常発酵させる酵母として仕込んだところの、常識では考えられないが変質者・異常性格者には稀れに出現する性的偏向を示すところの「父を殺し母をめとる」を異常とも病的とも受けとらず、尋常のパン種と見誤ったのである。

普通の見解では、戯曲エディプス王は運命悲劇であつて、ソポクレスは「人間のあらゆる善意の行為のむなしさ、いや人間の全存在の無常を恐ろしい緊迫した空氣の裡に描き出した。この劇には悪人は一人もない。次々に行われる善意の行為の偶然が王を破滅へと追いやる。それだけに彼の悲劇には救いがない。それだけに恐ろしい。見物は自分の足下に口を開いているかも知れぬ深淵に思わずぞと身憐いするのである」⁽⁹⁾。

見物に与えるこの底知れぬ恐怖、身憐いする感動。これが普通の見解に反対してフロイトが自分の解釈を強く主張する最も力強い支点なのである。彼は云う「近代の作家たちの筆になる人間たちが、もとよりその身に罪もないままに、運命に抗うにもかかわらず、呪や神託が彼らの身の上に実現されるのを見て、人々は少しも感動させられないのだ。近世の運命悲劇はいずれもかの古代の悲劇の如くには見る者を感動させないのである」

「エディプス王がそのかみのギリシヤ人を感動させたのと同じように今日の人々をも感動させることが出来る、とすれば、その理由は、この劇の効果は運命と人間の意志との対立にあるのでなくて、むしろその対立を証明している素材の特異性に求めらるべきである。……彼の運命がわれわれに感動を与えるのは、われわれもまた彼の轍を踏むかも知れず、われわれが生れてくる前に下された神託は、彼に対すると同じようにわれわれに對し呪をかけているからこ

そなのだ。そして人生最初の性的な感情を母親に向け、最初の憎悪と暴力的な願望とを父親に向けるということは、ひょっとするとわれわれ人間すべての運命の摂理だったかもしれないのだ。われわれが見る夢は、これをわれわれに証明している。父ライオスを殺し、母イオカステを妻としたエディプス王は、われわれの幼年時代の願望充足にすぎないのである。……詩人は作中にエディプスの罪を暴露しつつ、たとい抑圧されているとはいえ、依然として存在している近親相姦の衝動が潜んでいるところのわれわれ自身の中の心を認識させずにはおかぬのだ。……「われわれもまたエディプスの如く、自然がわれわれに課したところの、道徳を傷ける願望を、それと知らずに懷き続けて生きていのだ」(傍点は宮)。

ここにはフロイト一流の論証の進め方が、典型的に現われている。「今日の人にも感動を与えるとすれば」と云ったあと、必ず感動を与えることになっている。「エディプスの轍を踏むかもしれない」と云ったあと、すぐエディプスと同じ呪をかけられていることになっている。「エディプスの運命はわれわれ人間すべての運命だったかもしれない」と告げられたのにすぐ続いて、その運命を、「われわれの見る夢は、これをわれわれに証明している」と宣言する。フロイトが「われわれ」と云う時私はそれを彼一個のことであると願望して聞く。例えば「われわれの見る夢」はわれわれ一般ではなくて、フロイトの見る夢として読むのである。「エディプスの運命がわれわれに感動を与えるのは」、彼に感動を与えるのであり、「われわれの幼年時代の願望充足」も、彼フロイトの幼年時代の願望充足と思つて読めば、私にも納得がゆくのである。この事についてはあとで再び採り上げる。

「エディプス伝説が、両親に対する関係が性欲の最初のうごきのために不快にも掻き乱されるということを内容とした、非常に古い夢の材料から出てきたものだ」という明白な証拠は、ソポクレスの悲劇の本文そのものの中に存在している」とフロイトは云う。コリントスからの使者がコリントス王ポリュボスの死を報せ、エディプスを次の王として迎えに来た時、問答は次のようにとりかわされる。

× × ×

オイディプス とはいえ、母上の臥床^{ふしど}を恐れないわけにはゆかぬ。(母上とはコリントス王妃メロペを指す)

イオカステ 連命の定めがすべてで、先のことは何一つはつきりとはわからぬ人間に何を恐れることがございませう。できるだけ気ままに暮すが一番でございます。母上との結婚など、恐れることはございませぬ。大勢の人がもう以前に夢の中で母親と枕を交わしていますものを。いいえ、こういうことを何とも思わぬお人が、いちばん安楽に世を過すものでございます。

オイディプス 生みの母上が生きておわさずば、そなたのこの言葉はみんな言うたと言えるのだが、生きておいでになるからは、いかなそなたの名言でも、やはりおれは恐れぬわけにはゆかぬ。^(泣)

× × ×

フロイトはこの対話の中に現われているイオカステの台詞「夢の中で母親と枕を」採り上げて強調するのである。

しかし、前にも云ったように、この文句が古伝説にもあったのか、ソポクレスの創作であるのか、多分後者であろう。そこでソポクレスがイオカステに云わせたのであるとして、ソポクレス自身はその事を信じていたのか、或は彼自身は信じていないが、神託を恐れているエディプスを慰めるために、大勢の人がそういう夢を見ている、とイオカステに云わせたのか、その辺は何とも決定し難い。が、エディプス自身はそういう夢を見たことは無く、そういう夢を恐れているわけでもなく、ただ神託の実現(事実行為)を恐れているのだから、夢の中でどうこうだと云っても慰めにはならぬのである。慰めに効果をもたせるには、母親と同衾している人間が大勢いるとイオカステに云わせなければならぬまい。しかもイオカステは彼女自身が真実は自分の息子との間に二男二女を儲けたことを夢にも知らないで、気休めを云っているのである。それは彼女が欲したことではない。劇がそうなっているので、観客はそこに不自

然を感じないで恐ろしい運命の見えざる手を感じ、神の呪に弄ばされる人間の無力さを見るのではないか。ソポクレスは観客がそう感ずるように、神託を種にして劇の筋を巧みに構成したのであって、凡手ならかえって馬鹿馬鹿さとして滑稽を感じさせるかも知れないのである。フロイトはしかし、イオカステの台詞をすぐさま古代ギリシヤ人の真実として人間一般に普遍化し「母親と交る夢は、ギリシヤの昔と同じように、今日でも多くの人がこれを見て、且憤り且訝ってひとに話す」と断定する。けれども、今日の多くの人がそんな夢を見たという証拠を一つも彼は提出していない。多くの人が見てひとに話すと言うからには、事実の例証を挙げるべきで、そうしないところから判断して、私はフロイトが「多くの人」と云う時、これを彼一箇のことだろうと見る。仮に多くの人がこうした夢を見るとしても、これをひとに話すというのは到底考えられない。この見地からみれば、イオカステに「大勢の人が母親と枕をかわしている」と云わせているソポクレス自身は、事実大勢のギリシヤ人からそんな夢を打ち明けられていたのか、或は自分一箇の夢の体験から他人もそうだろうと推定しての話なのか、前者なら、それは極めて疑わしいし、後者なら、フロイトの場合と同じく、あり得ないことではなからう。母親との同衾の夢は、フロイトによれば「父親を殺す夢」「父親の死ぬ夢の補充的存在である」。この両者が相俟って、エディプス・コンプレックスを構成するのがフロイトの理論なのであるが、これまで見てきたように、現実具体的にこうした夢の実例は一例も述べられていない。典拠は母親関係は王妃であり母であるイオカステの台詞、父親関係は通行人を殺すという恐迫観念の原因を分析すると父親への殺人衝動であったという三十一歳の男の例だけで、どんな夢をどう見たのか、もとの夢の原形は報告されていないのである。しかし夢や強迫観念ではなしに、息子が現実に父親を殺す犯行は、存在しないわけではない。

我々がフロイトの立論、その立証の仕方を見て、彼が片手落ちだと思うのは、ソポクレスの書いた二行の台詞から、蚕が絲を紡ぐが如く、人間全体を蓋う普遍的欲望についての理論を繰り抜けるに当って、反証となる事例、反対

の事実にも全然眼もくれぬことである。ソポクレスが作劇に当って、エディプス王の古伝説にどの程度加工したか「ホメロスではオイディプスは最後まで王位にあり、のち戦場で殞れることになっているから」、⁽¹²⁾ 相当の新解釈が施されたと思われるが、戯曲の根本設定である第一と第二の神託は多分古伝説そのままであるらしいし、一応そうだとした場合、この第二神託の父を殺し母をめとるという想定はどこから出てきたものであろう。フロイトはこれを「自然がわれわれに課したところの、道徳を傷つける願望」「原始的な幼児願望」「たとい抑圧されているとはいえ依然として存在している近親相姦の衝動」と受けとって、普遍的人間性であると見る。古代ギリシャ人はどう見ていたかが問題だが、私は次のように推測する。フロイトの想定は人間の自然性に反している。この想定は普通の人間にとって、いやらしく汚なくむかむかする位気持ちが悪く、尋常の心には思い浮ばない観念である。フロイトは観念以前の幼児期の原始的衝動であると云うが、フロイトの性欲理論の基礎となっている乳児が母乳を飲み、幼児が大小便を排泄することも性的快感である、性的リビドの活動であるというような偏見と独断を承認しないなら、また解剖学的にも生理学的にも性器と性ホルモン分泌腺の未発達を考慮するなら、幼児が成人と同様の性的欲求・願望をもっているとは考えられない。自然の幼児には、このような衝動も、ましてこのような観念や願望は発生していない。もしあるとするならば、それは幼児期ではなく、思春期以後、神経症患者あるいは異常な変質者において発生するものと私は考える。またエディプス・コンプレックスは原始的でも普遍的でない。それはむしろ、社会的文化的燦熟期に、特殊の家庭環境において、変質的神経症的素質者の、思春期以後に出現する異常現象、或は畸型現象であらう。

「父を殺し母をめとる」願望は、人間性の自然でもなく、道徳的でもないこと、その故にこそそれが神の命令・神の呪として、古伝説の中に出てくるのであると私は考えたい。というのは、古代ギリシャの神話に現われる神々は人間に対し無慈悲で苛酷で残酷である。その上に神々はゼウス大神を始め、多淫で好色で嫉妬深い。姦通は日常のこととして行われる。こうした文化的歴史的な背景のあるところで、劇的な効果を盛り上げるためには、異常であ

り残酷であり、反道徳的であり、反人間的である要因こそ、劇作家の飛びつく材料であろう。人間的な、余りに人間的な要因が劇作の主モチーフとなるのは自然主義の近代になってからである。ソボクレスのみに限らずアイスキュロスもユウリピデスも、三大悲劇作家はみな、こうした要因を作品の中へ採り入れ、こうした要因をモチーフとしているということは、それが人間の極限的状況を描き出すのに都合がいいからであろう。エディプス王は自己の善意にもかかわらず残酷な神の呪によって翻弄され、絶大な苦悩に呻吟する英雄として描かれている。エディプス自身には近親相姦の願望も、その夢もなく、全く反対の正常人である。第二神託は正常であるエディプスに、普遍的人間感情に對立する異常な要請を神の命令として真向からぶつつける。ぶつつけられたエディプスは悩む。ここでエディプスが悩まないなら、幼児期願望の実現として喜んで受けいれるなら、劇は成り立たずソボクレスは観客に失望をもたらしであろう。神経症者の父親への殺意の夢を、フロイトは報告することを怠っているが、もしそうした研究があると思えば、その夢は苦悩の情緒を含まぬものであらうと私は推測する。母親との同衾の夢も、フロイトは実例を報告していないが、一般的に「多くの人は且憤り且訝って」「そういう夢は嫌悪感と共に体験される」とフロイトは云っているので、「多くの人を」フロイト個人と読み換えて、私は了解したいと思うのである。

フロイトは後年「夢判断」が版を重ねて八版になった時、VI「夢の作業」の(II)「夢における象徴による表現——種類、夢」の中に、エディプス夢という名称で、エディプス・コンプレックスの傍証となる夢を記述している。(この章に集められている夢の諸例は、「夢判断」の初版以後、彼の弟子によって集められ報告されたものが大多数である)。その一節に「……患者たちに、ひとは自分の母親と性交するエディプス夢を頻繁に見るものだと言調すると、彼らはへそんな夢は見た記憶がない」と答えるのが常である」とはっきり書いてある。私も、事実そうだと思う。しかしフロイトはこれで自説をひっこめはしない。彼は次のように続けている。「しかしその返答につれてすぐに別の、ぼんやりした、格別意味のない夢の記憶が浮び上る。本人はこの夢を度々見ている。そして分析は、これが同一

内容の夢、つまりエディプス夢であることを示す。私は母親との性交を偽装する夢の方が、そのものを示す夢より何度も頻繁に見られるということを確言し得る」。前述の中でフロイトの曲筆と思われる点を指摘すると、八格別意味のないぼんやりした夢Vを、人はそんなに記憶していないものである。そしてその夢を八度々見ているVというのは、それがぼんやりした夢である事と矛盾する。度々繰り返してみる夢はかなりはつきりした内容をもつものである。そこで彼が引用する偽装エディプス夢だが、彼は頻繁に見られることを確言するというけれども引用されているのはただ一例である。ある男の夢A彼は男Aが結婚しようとしている女Bと人目を忍ぶ仲になっている。その男に自分らの関係が感づかれて、女と男の結婚が駄目になりはしないかと怖れる。それでその男Aに友情を示し、寄り添って接吻するV。現実の生活では、彼は友人の妻といい仲になっている。彼は友人の口にした言葉から、自分らの関係が感づかれているのではないかと疑っている。ところがこの友人は病気で命旦夕に迫っている。男は友人が死んだら若い未亡人と結婚しようとして実際に考えている。フロイトの分析は、この男が「夫を殺して、その妻を自分のものにしよう」という願望をもっていると解釈する。「夫に対する彼の敵対的願望は、彼が子供の時の父親との関係の記憶から由来するわざとらしい優しさの背後に隠れている」と。

私が考えるに、この男が彼女の夫を殺そうという願望をもっているという解釈は、行きすぎであろう。いづれその友人は死ぬことをこの男は知っているし、ただ早く死ぬことを願っているかもしれないが、それは夢の中へは表現されていない。わざとらしい優しさと接吻が父との幼児期記憶から由来しているという事をフロイトは少しも証明していない。ただそう解釈を与えているだけである。大体、友人と父が入れ換えになるフロイトの分析（解釈）はこじつけではあるまいか。従ってこの夢はエディプス・コンプレックスを示す夢とは考えられない。ただの密通の夢である。この患者は母親への欲望を少しも夢の中で表現していないのである。フロイトは患者たちが異口同音に八そんな夢をみた記憶はないVというのを額面通りに受けとるべきなのである。

もう一点、エディプス・コンプレックスと名付けられたものが普遍的に人間に見られる欲動なら、同様なモチーフを伝える古伝説や劇作がもっとあってもいいと考えられるが、残念ながらこの予想は当たらない。反対に息子と娘が母を殺す復讐劇は、ほかならぬソポクレスに「エレクトラ」なる作品があり、三大悲劇作家の一人アイスキュロスは「供養する女たち」の題名で、ユウリピデスは同名の作品「エレクトラ」を書いていて、作品はいづれも現存している。エディプス王の後日譚を劇にした「コロノスのオイディプス」で二人の娘はエディプスに味方し年老いた衰残の父を助けるのに、二人の息子は全く父親を顧みず、自分の政權欲にからんで父親を利用しようとするだけである。長女のアンチゴネーの後日譚は作品「アンネゴネー」となるが、そこでは彼女は王に禁じられた兄の葬礼を敢然と執行して自分が殺される。彼女は兄思いの妹として登場するのである。

以上、エディプス一族の親子兄弟夫婦の関係をソポクレスがどう扱ったかを見てみると、子としてのエディプスとその親以外には近親相姦の因子は現われていない。フロイトの云うような息子と両親の關係は、現実には余程異例異常な事例であって、それ故に劇では神の呪として取り入れられ悲劇の設定となるのである。エディプス・コンプレックスが普遍的現象であったなら、運命の悲劇とならないのである。

劇「エディプス王」に続いて、フロイトは更に「ハムレット」を引合に出す。そしてハムレットの悲劇がエディプス王と「同じ地盤、同じ材料だ」と主張するのである。彼の主張の根拠は、ハムレットが復讐を逡巡して一寸のばしにのぼすのは復讐の相手である伯父がハムレット自身の幼児願望（母と結婚したい）の実現者であって、彼の良心の呵責は伯父よりも自分自身に向うから、それで一見優柔不断に陥るのである、との解釈である。私はハムレット劇を見た事もないし（映画は見たが）シェクスピア研究もしたことがない。世界には算えきれないほどのシェクスピア研究とハムレット研究があるらしいが、ここでは日本の一専門家の意見を引くに止めておきたい。⁽¹⁾（フロイトもゲーテとブランドスは引用している）。

解説は次のように云う。まづ十二世紀末に「デンマーク國民史」にハムレット物語があつて、すでにそこにハムレットの筋立ては殆んど揃っている。一五八二年にフランスの悲劇物語に同じ話の骨子があり、シェクスピアと同時代の復讐劇の大家キッドの「原ハムレット」がある。ハムレットのありかたの謎と矛盾は、前からあつた粗雑な物語に作者が自分の新しい要素を付け加えたことからくる無理にある。この意味ではハムレットは失敗作である。（この評価の背景には、シェイクスピアは当時の大衆や貴族を劇場の中で喜ばせる目的で書いた、いわば座付作者通俗戯作者という認識がある）。ゲーテがハムレットを線の細い感傷家、コウルリッヂが優柔不断の反省家と見ているのは一面である。……彼の全体像は理想家と現実家、意識家と行動家、不信と信頼、意地悪と無邪氣、軽率と慎重、上品と下品、そういった相反するものの混合である。彼は大きな振幅をもって生きぬく。……臨機応変、力一杯動き廻る。……それが演戯であり、ハムレットの最大の魅力は彼が常に演戯していることにある。

従つてハムレットの言動から一つの一貫した性格を探り出そうとするのは誤りである。「ハムレットの精神状態を近代心理学で説明するのは間違っている。なぜなら、シェイクスピアはそういうつもりで彼を構想したのでなく、またハムレットはあくまでも劇中の人物であつて、歴史上の存在ではないからである」とウィルソンは書いている、と。

私がこれ以上蛇足を付け加える必要はあるまい。フロイトのハムレット解釈は彼独特の、あえて云えば彼の独りよがりである。ハムレットがすぐ復讐するようにこしらえれば芝居がお終いになって見せ場がなくなるから、彼はぐずぐずしているのである。ハムレットは作者が観客を喜ばすために作り上げた人物である、という指摘は背景に当っていると思う。この批評はそっくりそのまま劇「エディプス王」に当てはまる。作者ソポクレスはシェクスピアと同じ立場にあつたであらう。エディプス王はこしらえもので実在の人物ではないのである。

だが、古伝説の中に、なぜエディプス王のような悲運を背荷つた人物が出現するのであらう。よく分らない話をあげつらうのであるから、結局推測と想像によるはかないが、多分世の神話研究とか伝説研究というものは、そんなも

のであろう。古代ギリシヤの神々がおそろしく人間臭いことをまず認めるとして、呪というものの復讐的な魔力の实在、親の罪は子に報いる、子が償うという因果応報的な思想、つまり背景になっているのは復讐と償いで、物語の最初の伏線はライオス王が美少年に恋着してこれを理不尽に殺した所にある。子であるエディプスは親の罪を償わねばならぬし、父ライオスは罰を受けねばならぬ。これは古代人のみでなく、現代人もそう感じていると私はみている。ユダヤ思想、キリスト教思想の中にもこうした觀念の系譜は迹れるのではないか。報復、犠牲、償い、贖い。罪と罰。この問題はこのくらいに端折って、父を殺すという事実、母と通ずるという事実は、古代ギリシヤにもおそろく時々あったものであろう。それは生物的には異常であり、それ故感情的には嫌悪され、秩序を乱すものであるから社会的には指弾されるものである。それは罪である。罪は罰せられなければならない。一方、こうした異常行為を行う者は、自然の性として、また自ら欲してこれを行うのでなく、こういう行為を行うこと自体が既に神の呪と人の呪を受けているのだという古代ギリシヤ人の受けとり方もある。そして呪は当人の破滅に至るまでは解けてはいけないのである。また罪を犯し罰を受けるのは、民の一人でなく、民の代表、王でなければならぬ。エディプスがこの役に選ばれたのは、キリストが贖罪を引受けているのと、筋道はどこか似ているところがある。劇ではエディプス王は、自ら眼玉をくり抜くことになっている。神は無慈悲で冷酷である。神は裁く者であり罰する者である、と古代人は考えていたに違いない。王妃イオカステは表面上何の罪もないが、最後に縊れて死ぬのは、おそらく人倫に反した恥かしさに由るのではないだろうか。名譽と共に恥辱は古代ギリシヤ社会で既に一般的にあった觀念と考えられる。大抵の祝詞の言葉に、その母を犯せる罪、その子を犯せる罪とあるように、日本の古代にもその事実があったことは明白だが、既に罪と呼ばれているから、普遍的現象ではなく、少数の異常現象であつたと推測される。

エディプス王伝説は確定的文書があるわけではなく、伝説の成立は、ある時一人の作者が作るわけではないから、我々の推測も可能性の模索であることをお断りしておく。道德觀念の発生・人倫の成立史について、我々はまだよく知

らないのである。

フロイトの想定するエディプス・コンプレックスは、人間以前の人間についての資料があれば最も好都合であり、系統発生は個体発生で繰り返されるとの前提で、幼児の観察が重視されるわけだが、幼児の思想は知る手段がなく、幼児の行動はフロイトとは別の解釈も出来るのである。

にも拘らず、フロイトはなぜエディプス・コンプレックスに固執するのであろうか。私は、フロイト自身に特殊の家庭環境と特有の体験があつて、それが彼の主張を内面から支えているのではないかと疑っている。それに常識と道徳に真向から挑戦するエディプス・コンプレックスの着想は、キリスト教社会に対しドイツ人一般に対し憎悪と怨恨を抱き造反的復讐的であつたフロイト並びにユダヤ人一般の精神的基調からすれば、首肯されないでもない。

フロイトの没後十四年になつて、彼の同志であり弟子であつたウエルズ人アーネスト・デョーンズは一九五三年、浩瀚なフロイトの伝記を刊行した。大版の三巻もので総頁一四七六頁である。⁽¹⁵⁾我々にとって未知のフロイトの生涯は、この本によって可成明らかになつた。それに先立つて、デョーンズその他の努力でフロイトの一生のうち全く不明であつた一時期、奇怪な耳鼻科の開業医ウィルヘルム・フリースとの交友関係（一八八七年から初まり一九〇二年に絶交する）始末記とでも云つていい、秘密のフロイトの手紙一五三通が上梓された。⁽¹⁶⁾これらの手紙が保存されたこと、目の目をみるに至つた事情については、興味津々たる物語が伝えられているが、それはそれとして、手紙の内容は、フロイトが自己分析と自称する彼の内奥の心の秘事を洩している個所が相当あつて、フロイト並びに精神分析研究者にとっては欠くべからざる一巻となつた。

私がフロイトのエディプス・コンプレックスの発想について、私なりの推測をなし得るのはフロイト自身の著作（全集十七巻）のほか前記二著のおかげである。それはデョーンズの意図に反する試みかも知れないが。これらの事については稿を改めて次回に書くつもりである。（未完）

註 (イ) フロイトの立証過程 (一) 類型論

- (1) Freud, S., *Die Traumdeutung*, 1900.
S. Freud, *Gesammelte Werke I/II*, (Mit den Zusätzen bis 1935) 1948.
邦訳 フロイト選集 第十一卷第十二卷、高橋義孝訳 日本教文社 昭和二十九年第二十版昭和四三年。
ほかに新関良三訳 アルス 昭和五年、昭和八年がある。
 - (2) 前掲 高橋訳 五頁。
 - (3) 前掲 高橋訳 二七九頁。
 - (4) 男の子、女の子と訳してゐるのは原本では *Man, Weib* となつていて、児童の意を含まない。(S. 262)
原註で (高橋訳では三〇〇頁)、両親のうち、自分の愛している方の親が死ぬかもしれないという威嚇となつて現われ
一種の刑罰的傾向の出現によつて、事態は道徳的反応として、屢々陰蔽される。十中の一・二分をこれで説明するつも
りらしい。
 - (5) 高橋訳では第四戒律、原本でも第四であるが、父母を敬うべしは第五戒律である。
 - (6) 原本では *Hysterische Gegensatzreaktion, Abwehrerscheinung* S. 266. となつてゐるので、高橋訳の対比物反応及び
抵抗現象とあるのを訂正した。
 - (ロ) フロイトの立証過程 (二) 戯曲オイディプス王
 - (8) *ギリシヤ悲劇全集 第二卷* 人文書院 昭和三十五年再版昭和四〇年。
ソポクレス篇 高津春繁訳 オイディプス王 二二四頁 (解題)。
 - (9) 前掲 高津訳 オイディプス王解題。
 - (10) 前掲 高橋訳 三〇九頁。
 - (11) 前掲 高津訳 オイディプス王 二五三頁。
 - (12) 前掲 高津訳 オイディプス王解題 二二四頁。
 - (13) 高橋訳 夢判断下巻 一四五頁。
- 前掲 *Gesammelte Werke I/II* S. 404.
Typisches Beispiel eines verkappten Ödipus traumes.
(14) 世界の文学 中央公論社 昭和三十八年 第一巻シキストムナ 福田恒存訳 解説 五三八頁。
(15) Jones, E., *Sigmund Freud, vol. I, New York, Basic Books Ins. 1953. vol. II, 1955, vol. III, Hogarth Press. 1957.*
(16) Freud, S., *Aus den Anfängen der Psychoanalyse, Briefe an Wilhelm Fliess, Abhandlungen und Notizen aus den Jahren 1887-1902* Imago. 1950.